

漢法苞徳塾資料	No. 166
区分	治療論・臨床
タイトル	水腫の理解と治療
著者	八木素萌
作成日	1990.07

◎『医理』清・余国佩

「肺燥則不能運布水精・中宮水液既難四布・直注下焦・腹痛泄瀉・或外溢為腫」

(肺燥ナレバ水精ヲ運布スルコト能ワズ・中宮ノ水液モ既ニ四布スルコト難ク・直ニ下焦ニ注イデ・腹痛シ泄瀉ス・或ハ外溢シテ腫ヲ為ス)

◎『医学心悟』清・程国彭

「～東垣云・渴而小便不利者・熱在上焦氣分也……不渴而小便不利者・熱在下焦血分也～」

(～東垣云フ・渴シテ小便不利ノ者ハ・熱上焦ニ在リ氣分ナリ……渴セズシテ小便不利ノ者ハ・熱下焦ニ在リ血分ナリ～)

「～大抵四肢腫・腹不腫者表也・四肢腫・腹亦腫者裏也～」

(～大抵四肢腫レテ・腹腫レザル者ハ表ナリ・四肢腫レ・腹マタ腫レル者ハ裏ナリ～)

「～煩渴口燥・溺赤便閉・飲食喜涼・此属陽明熱也・不煩渴大便自調・飲食喜熱・此属陰水寒也～」

(煩渴シテ口燥キ・溺赤ク便閉シ・飲食ニ涼ヲ喜ムモノハ・此レ陽明ノ熱ニ属スナリ・煩渴セズ大便自ヅカラ調ノイ・飲食ニ熱ヲ喜ムモノハ・此レ陰水ノ寒ニ属スナリ～)

◎『素問』水熱穴論第 61

「～腎者至陰也・至陰者盛水也・肺者太陰也・少陰者冬脈也・故其本在腎・其末在肺・皆積水也・帝曰・腎何以能聚水而生病・岐伯曰・腎者胃之関也・関門不利・故聚水而 從其類也・上下溢於皮膚・故為跗腫・跗腫者・聚水而生病也・帝曰・諸水皆生於腎乎・岐伯曰・腎者牝藏也・地氣上者属于腎而生水液也・故曰至陰・勇而勞甚則腎汗出・腎汗出逢于風・内不得入于蔵府・外不得越于皮膚・客于玄府・行于皮裏・伝為跗腫・本之于腎・名曰風水～」

(～腎ハ至陰ナリ・至陰トハ盛水ナリ・肺ハ太陰ナリ・少陰ハ冬脈ナリ・故ニ其ノ本ハ腎ニアリ・其ノ末ハ肺ニ在リテ・皆積水ナリ・帝曰ワク・腎何ソゾ以 ッテ能ク聚水シテ病ヲ生ズルヤ・岐伯曰ク・腎ハ胃ノ関ナリ・関門利セザルノ・故ニ水聚マリテソノ類ニ從ウナリ・上下ニ皮膚ニ溢ル・故ニ跗腫ト為ル・跗腫トハ・水聚リテ生ジタル病ナリ・帝曰ワク・諸々ノ水ハ皆腎ニ生ズルカ・岐伯曰ク・腎ハ牝藏ナリ・地氣ノ上レル者ハ腎ニ属シテ水液ヲ生ズナリ・故ニ至陰ト曰ウ・勇ニシテ勞スルコト甚ダシキトキハ腎汗出ズ・腎汗出デテ風ニ逢イテ・内ニ蔵府ニ入ルコトヲ得

ズ・外ニ皮膚ニ越スルコトヲ得ザレバ・玄府ニ客シテ・皮裏ヲ行キ・伝エテ・附腫ヲ為ス・之レ腎ニ本ズク・名ンデ風水ト曰ウ～)

「～腎俞五十七穴・積陰之所聚也・水所從出入也・尻上五行・行五者・此腎俞。故水病下為附腫・腹大・上為喘呼不得臥者・標本俱病。故肺為喘呼・腎為水腫・肺為逆・不得臥・分為相輸俱受者・水氣之所留也。伏菟上各二行・行五者・此腎之街也・三陰之所交結于脚也・踝上各一行・行六者・此腎脈之下行也・名曰太衝。凡五十七穴者・皆藏之陰絡・水之所客也～」

(～腎ノ俞ノ五十七穴ハ・積陰ノ聚マル所ナリ・水ノ出入ニ從ウ所ナリ・尻上ノ五行ニ・行グルコト五ナル者ハ・此レ腎ノ俞ナリ・故ニ水病ハ下ナレバ附腫、腹大ヲ為シ・上ニハ喘呼シテ臥スコト得ザルヲ為ス者ナリ・標本トモニ病ムナリ。故ニ肺ハ喘呼ヲ為シ・腎ハ水腫ヲ為シ・肺ハ逆ヲ為シテ・臥スコトヲ得ザルモノナリ・分チテ相輸スルヲ為スヲ俱ニ受クル者ハ・水氣ノ留マル所ナリ。伏菟上ニ各々二行シ・行グルコト五ナルハ・此レ腎ノ街ナリ・三陰ノ脚ニ交結スル所ナリ・踝上ニ各々一行シテ・行グルコト六ナル者ハ・此レ腎ノ下行ナリ・名ビテ太衝ト曰ウ。凡テ五十七穴ハ・皆藏ノ陰絡ニシテ・水ノ客マル所ナリ・～)

〈参考〉尻上五行…督脈～脊中・懸樞・命門・腰俞・長強

太陽膀胱經～大腸俞・小腸俞・膀胱俞・中膂俞・白環俞

～胃倉・盲門・志室・胞肓・秩辺

伏菟上各二行・行五者～下腹部の任脈を挟む左右の二行のこと

中注・四滿・氣穴・太赫・横骨

外陵・大巨・水道・归来・氣衝

踝上各一行～踝の上の左右の各一行の事

太衝・復溜・陰谷・照海・交信・築賓

以上の五十七穴

◎『素問』氣穴論第 58

「～水俞在諸分・熱俞在氣穴・寒熱俞在兩骸厭中～」

(～水俞ハ諸々ノ分ニ在リ・熱俞ハ氣分ニ在リ・寒熱俞ハ兩骸ノ厭々タル中ニ在リ～)

註①…寒熱俞は足少陽胆經の陽関穴である。

註②…「分」は「分肉の間」の事・「氣分」は「氣の分」のこと・「兩骸」は兩足の「骸」の事で「音は鞋であって脛骨のこと」であると楊維傑『黃帝內經素問譯解』が註している。

◇配穴例

『甲乙經』

- ・中府……「面、腹腫」、
- ・天府……「身脹、逆息不得臥、風汗出・身腫喘喝・多睡恍惚・善忘・嗜臥不覺」、
- ・尺沢……「腹脹喘」、
- ・列缺……「暴腫」、
- ・関門……「腹脹善満、積氣・＜遺溺＞一関門、神門、委中主之」、
- ・天枢……「大腸脹・腹脹腸鳴、氣上衝胸、不能久立、腹中痛濯々～食不化、不嗜食、身腫～・腹脹腸鳴氣上衝胸」、
- ・水道……「大小便不通・小腹脹満」、
- ・氣衝……「石水・腹満癰痛、不得反息・女子月水不利、或暴閉塞、腹脹満癰、」、
- ・三里……「五臟六腑之脹、皆取三里、三里者、脹之要穴也」、
- ・解溪……「風水面附腫、顔黒、解溪主之」、
- ・衝陽……「風水面附腫、衝陽主之」、
- ・陷谷……「水腫留飲、胸脇支満、刺陷谷出血、立已」、
- ・隠白……「腹脹逆息・腹中有寒氣、隠白主之」、
- ・肝俞……「肝脹者、肝俞主之、亦取太衝」
{『靈樞』 脹論第 35—肝脹者 脇下満而痛引小腹}、
- ・脾俞……「脾脹者、脾俞主之、亦取太白」
{『靈樞』 脹論第 35—脾脹者、善噦、四肢煩惋、体重不能勝衣、臥不安}、
- ・腎俞……「腎脹者、腎俞主之、亦取太谿」
{『靈樞』 脹論第 35—腎脹者、腹満引背央々然、腰髀痛}、
- ・中髎……「氣癰 中髎主之」、
- ・委陽……「胸満膨膨然、実則閉癰、腋下腫、虚則遺溺、脚急兢兢然、筋急痛、不得大小便、腰痛引腹不得俛仰、委陽主之」、
{『靈樞』 邪氣藏府病形第 4—三焦病者、腹脹氣満、少腹尤堅、不得小便、窘急、溢則為水、留則為脹、候在足太陽之外大絡 絡在太陽、少陽之間、亦見于脈、取委陽}、
- ・胃倉……「臏脹水腫、食飲不下、多寒、胃倉主之」、
- ・胞肓……「少腹満堅、癰閉下重、不得小便、胞肓主之」、
- ・湧泉……「少腹中満、小便不利、湧泉主之」
{『靈樞』 癰狂第 22—内閉不得洩、刺足少陰太陽与骶上以長鍼}、
{張介賓の註～～内閉不得洩者、病在水臟、故当刺足少陰經之湧泉、築賓；足太陽經之委陽、飛揚、僕参洩骶、金門等穴。骶上、則督脈尾骶骨之上、穴名長強。刺以長鍼、第八鍼也}、
- ・大鐘……「足少陰之絡、～実則癰閉、虚則腰痛～」、
- ・復溜……「風逆四肢腫、復溜主之」、
- ・陰谷……「溺難・腹脹満・少腹脹満・腹偏腫」、

- ・横骨……「少腹痛、溺難」
 {『外台』『千金』には少腹満、小便難と註記}、
- ・四満……「振寒 大腹石水」、
- ・天泉……「石水」、
- ・三陽絡……「嗜臥、身体不能動揺、大湿、三陽絡主之」、
- ・京門……「溢飲、水道不通、溺黄、少腹痛、裏急腫<外台——少腹裏急痛>、洞泄、
 体痛引背、京門主之」、
- ・維道……「咳逆不止、三焦有水氣、不能食、維道主之」、
- ・陽陵泉……「胆脹者、陽陵泉主之」、
- ・大敦……「実則閉癰、少腹中熱、善寐、大敦主之」、
- ・行間……「溺難、腹中瘕満、少腹腫、心下満、癰、～行間主之」、
- ・太衝……「暴脹、腰痛少腹満、小便不利如癰状・女子疝 及少腹腫、溏泄、癰、遺溺～
 太衝主之」、
- ・蠡溝……「実則～小便不利如癰状、～蠡溝主之」、
- ・足五里……「少腹中満、熱閉不得溺、足五里主之」、
- ・章門……「奔豚腹脹、章門主之・石水～章門及然谷主之」、
- ・期門……「婦人産餘疾～脹痺腹満～期門主之」、
- ・会陰……「小便難、竅中熱～会陰主之・身腫、皮膚不可近衣～会陰主之」、
- ・曲骨……「膀胱脹者、曲骨主之；小便難、水脹満、溺出少、転胞不得溺、曲骨主之」、
- ・関元……「胞転不得溺、少腹満、関元主之；
 氣癰溺黄 {千金云：寒熱不節、腎病不可以俛仰} 関元及陰陵泉主之」、
- ・石門……「三焦脹、石門主之；水腫腹大、水脹、水氣行皮中、石門主之；
 氣癰、小便黄、氣満、虚則遺溺、身時寒熱、吐逆、溺難、腹満、石門主之；
 氣癰、小便黄、虚則遺溺、石門主之」、
- ・陰交……「水脹、水氣行皮中、陰交主之」、
- ・神闕……「水腫 大臍平、灸 臍中～」、
- ・中脘……「胃脹者、中脘主之、亦取章門」、
- ・上脘……「寒中傷飽、食飲不櫛化、五臟臘脹、
 心腹胸脇痞満脹、心下有膈、嘔血、上脘主之」、
- ・長強……「淋瀝癰、大小便難」、
- ・上星……「面・腫、上星主之、先取諵諵、后取天牖、風池」、
 『帶脈為病、腰腹縦溶溶、如囊水之状 {一云、腹満腰溶々如座水中} ；；
 {難經二十九難に〈腹満、腰溶溶若座水中〉とある}』

◇以上『鍼灸甲乙經俞穴重輯』より水腫に関連深いものを拾う、他にも多々見えるので
もっと拾い出すべきかも知れない

『子午鍼灸療法』〈徐惜年・陳碧琉・承淡安〉より

渾身・腫（卒腫）	曲池・合谷・三里・内庭・行間・三陰交。
水腫	陷谷・列缺・腕骨・合谷・間使・陽陵泉・陰谷・三里・曲泉・解溪・復溜・公孫・衝陽・厲兌・陰陵泉・胃脘・水分・神闕。
水腫氣脹滿	復溜・神闕。
癰閉	大敦・照海・委陽・大鐘・行間・委中・陽陵泉・石門。
淋癰	曲泉・復溜・三里・氣海・関元・三陰交。
小便淋澁不通	照海・陰陵泉・三陰交・関衝・合谷。
渾身脹滿、 肘腫生水	照海・氣海・三里・曲池・合谷・内庭・行間・三陰交。
蠱脹	三陰交・水分・三里。
水腫	水分・氣海。 △腎絡実則癰閉……………大鐘一瀉。
膀胱氣閉	風府・三里・水分（灸）・水道（灸）・三里・陰交。
水腫脹滿	水分・中脘・復溜・三里
浮腫	復溜
水腫	水分（灸）。 水蠱～刺偏歷利小便・医大人之水蠱
小便不通	陰陵泉（瀉）・三里（瀉）。

△「子午鍼灸療法」の配穴例には「百症賦」「標幽賦」「席弘賦」「玉竜賦」「通玄指要賦」「靈光賦」「蘭江賦」「玉竜歌」「勝玉賦」「雜病穴法歌」「太乙歌」「肘后歌」などの配穴の検討と援用が含まれている。また「鍼灸集成」「鍼灸四書」「神農經」「鍼灸大成」「千金」「外台」などからの引用も見え、「楊氏治症」配穴例も見える、序文から「鍼灸大成」の編著者の楊繼洲の配穴と判断できる。この「子午鍼灸療法」が『靈樞』官針第7の「故用針者不知年之所加・氣之盛衰・虚実之所起・不可以為工也」（故ニ針ヲ用イル者ハ年ノ加ユル所、氣ノ盛衰、虚実ノ起コル所ヲ知ラズシテ、工ヲ為スコトヲ以ッテスベカラズ）その他の「氣」の変化消長を把握して治療に臨むべきことを言う文を強く引用している点は著者の意図している所を物語っていると思われる。

◎『針灸配穴』〈天津市中医医院〉

渾身卒腫・面浮腫大	曲池・合谷・足三里・内庭・行間・三陰交・針之 内踝下赤白肉際灸3壯。
四肢面目浮腫	照海・人中・合谷・足三里・絶骨・曲池・中脘・腕骨・脾俞・胃俞・ 三陰交、針之。
浮腫膨脹	脾俞・胃俞・大腸俞・膀胱俞・水分・中脘・足三里・小腸俞、鍼灸之
水腫氣脹満	復溜・神闕、灸之
四肢及面胸腹皆浮腫	水分・氣海、灸100壯。
脹満	中脘・足三里、鍼灸之 凡脹皆取足三里、是脹之要穴、又取中脘・氣海、或鍼或灸之。
小腹脹満	中封・然谷・内庭・大敦、鍼之。
癰閉	照海・大敦・委陽・大鐘・行間・委中・陽陵泉・石門、鍼之。
小便淋閉	関元・三陰交・陰谷・陰陵泉・氣海・太谿、鍼之。
石淋	関元・氣海・大敦、鍼之。
氣淋	氣海・関元、鍼之。
血淋	陰陵泉・関元・氣衝、鍼之。

◎まとめ

- a) 鍼灸関係の古書を調査していて気付くことは、主治証の記述の仕方の大部分が或る具体的な症候としてしか記述されていない点と、殆どの場合に「補」すのか又は「瀉」すのかに関して記述されていない点と、基本的な治則との関連が不分明である点などである。湯液の治療の場合には所謂八法の基本的な治法原理があるが、鍼灸にはこれに相当するものが無いのである。『靈樞』九鍼十二原第1の四大原理で湯液治療の「汗・吐・下・和・清・温・消・補」の八法のような方法を実現するには、どうしたら良いかと言う具合に問題が樹てられないものであろうか？或は「経絡」の調整によって治療するのが鍼灸であるから、薬を用いる場合の八法など考える必要は無いと言う論もあろう。
- b) 「水腫」と「浮腫」とは漢法医学においても異なった概念である。とは言えいずれも水分の代謝異常である。これは「肺」「腎」「脾」の三つの『臓』の変調であるものとして把握されて来た。『臓』と表裏関係にある『腑』も大いに関連している点も強調して置かななくてはならない。「肺」―「大腸」・「脾」―「胃」・「腎」―「膀胱」である。また、『気化』しなければ「水」は「津液」＝「生理的な活性状態にあって体内で機能している水分」に化生して体内を廻らない、その意味では「三焦」も深い関連性を持っている。
- c) 現代医学の言う「肝臓性の浮腫」「心臓性の浮腫」「栄養失調＝低蛋白性の浮腫」などとの関連はどのように把握しているのであろうか？「肝」は剛柔関係において「大腸」と密接な関係にある、「肺」と「脾」とは相剋的關係にあり、また「脾」とは「胆」が剛柔関係にあるのでこの

面でも関係がある。「腎」とは母子関係にある、「三焦」ともこれと表裏関係にある「心包」が「肝」と母子関係にあるから関連する。この仕組みが「肝」関連の「水」の『気化』機能を構成している。「心」は具体的な臓腑機能としては「心包」に他ならない、相剋関係において「腎」および「肺」と深い関係にある。「心包」は表裏関係において「三焦」と結ばれている。剛柔関係は「膀胱」と結んでいる。臓腑の各々の相互関係が正常に保たれていれば健康であり、治療とはこれを回復しようとする行為である。故に臓腑の相互関係論を掌握しなければならない。母子関係・相剋関係・剛柔関係・表裏関係・三陰三陽の同類と連接の関係・子午の接続と対との関係・十干の陰陽と五行分類・十二支の陰陽と五行分類・干支の相関関係など等と複雑に錯綜している。この仕組みで「肝性浮腫」も「心性浮腫」も把握できる。「クワシコール」の問題は「脾絶」に陥っていなければ、まだ対策が樹てられる。

d) 漢法医学においては「保津」を非常に重んじる。浮腫や腫脹の問題は津液の異常であるから重要な臨床問題である。上記の種々の配穴のいずれを採用するのかは病症を正確に解析して、その把握に応じたものを選択する事が原理である。

e) ・「濁気在上則生臌脹」(『素問』陰陽応象大論第 5)、
 ・「二陰一陽発病・善脹・心満・善気」(『素問』陰陽別論第 7)、
 ・「結陽者腫四肢」(『素問』陰陽別論第 7)、
 ・「陰陽結斜・多陰少陽・日石水・少腹腫」(『素問』陰陽別論第 7)、
 ・「三陰結謂之水」(『素問』陰陽別論第 7)、
 ・「陽明……所謂上喘而為水者・陰気下而復上・上則邪客於蔵府間・故為水」
 (『素問』脈解第 49)、
 『靈樞』五癰津液別論第 36、『靈樞』水脹第 57、『素問』氣厥論第 37、『素問』水熱穴論第 61
 などに重要な記述があるので詳細に研究すべきであり、また『金匱要略』には分類診断および治療上の詳細な記述がある。

f) 鍼灸治療の四大原則として、『靈樞』九鍼十二原第 1 の記述がある。

- [1] 虚則実之 (虚スルトキハ之レヲ実セシメ)
虚し冷にして軟弱陥凹なものは、実するように鍼を行ない。
- [2] 満則泄之 (満ナルトキハ之レヲ泄ラセシメ)
膨満腫満している場合には泄らすように鍼を行ない。
- [3] 宛陳則除之 (宛陳ナルトキハ之レヲ除キ)
古く滞おるものの場合にはそれを除き去るように鍼を行ない。
- [4] 邪勝則虚之 (邪勝ツトキハ之レヲ虚セシム)
邪が勝って所謂邪実の状態の場合にはそれを虚せしめるように鍼を行なう。

この施術の具体的な手法も記述されている。

g) 経脈を調整して全身での気血の疎通を十全なものにすることが実現すれば、湯液治療の八法の運用に相当していると言えるであろうか？鍼灸学ではこの部分に対応する理論構成は貧弱であるという観はまぬがれない。然しながら、『内経』には「原穴」の治病論的な意味の記述や、種々の病症に対する治法の記述があり、また「経脈」や「穴性」の生理的意味に関する記述も少なからず存在している。また、歴史的にも「穴性」や「特定の組み合わせ穴」の治病的性質やその他の認識が形成されて来ている。それらの意識的な運用の学を構成することが出来れば、湯液治療が「八法」を「薬味の性質」を利用し必要な修治を加えた上で、「君臣佐使」の論を用いて、「八陣」の構成し又基本的方剤を作った。そして、これを効果的に適用する為に「八法」を組み合わせた「基本的な常用治法」を構成しているが、これと同様な治療医学の体系化が鍼灸医学・鍼灸医術に達成出来るものと考えられる。診察は単に「経絡変動」を把握して「虚実」に応じた施術を加えて「経絡」が調整されれば佳しとする如き雑な治療理論のレベルに比較して遥かに高次元のものを建設して行かなければならない。